

THEATRE E9 KYOTO 上演作品アーカイブ

2021 年度活動報告

本稿では、京都市南区東九条南河原町に所在する民間劇場 THEATRE E9 KYOTO（以下、E9）と京都市立芸術大学芸術資源研究センター（以下、芸資研）の協働事業・研究として取り組まれている「E9 アーカイブプロジェクト」について記す。

E9 アーカイブプロジェクトは、佐藤知久教授、中井悠講師の下、2020 年 1 月から試験的にはじまり、本格的に稼働するのは、2020 年度からであった。この頃よりコロナ禍による劇場の一時閉鎖を余儀なくされ、プロジェクトの実質的な稼働は同年 9 月からとなった。初年度の運営は、京都市立芸術大学の学部生または院生の 10 名ほどと共に行った。

アーカイブの対象は、THEATRE E9 KYOTO で上演され、かつ、アーティストの同意を得られた諸作品。記録の内容は、デジタル化できるものに限定し、具体的には、記録動画、広報物のデータ、テクニカルライダーなどである。各種データは、目録と共に E9 と芸資研に保存される。保存されたデータの活用については、研究目的で、E9 及び芸資研でのクローズドな環境に於いて視聴閲覧できるととどめている。更なる活用や公開の在り方について検討が続けられている。

20 年度の最後には、中井講師よりアーカイブの在り方について考察を深めるべく、イェレナ・グラズマン氏によるレクチャーを提案頂き、オンラインにて実現した。同レクチャーは、一般にも公開された。グラズマン氏の編集する『Emergency Index: An Annual Document of Performance Practice（エマージェンシー・インデックス：パフォーマンス実践の年間記録）』が紹介された。「ラディカル・インクルージョン」という理念のもと、掲載を希望する全ての作品をペーパーブックという形で収録する。1 作品あたり、1 ページの作品紹介と 1 ページの写真という構成。同ブックは、書店やインターネットにて世界中で購入が可能となっている。アーティストに対しても市民に対しても、望めばアクセス可能な最大限開かれた仕組みを持っている。また、テキストと写真を編むという簡素な手法により、事業の持続可能性を担保している。

21 年度は、東京大学に移籍された中井講師にかわり、筆者がプロジェクトリーダーとなった。運営にあたっては、新たにプロジェクトメンバーを募集する際、佐藤教授から学生だけでなく広く社会に公募してはどうかのご提案をうけた。この取り組みを一つの運動として輪を広げてみることで、無機的なアーカイブ実務をより有機的に創造的に考えてみようというものだ。結果、京都市立芸術大学の学生の他、アーティスト、研究者、映像関係者、批評家、主婦などの多様な職能や背景をもった方々が 10 名ほど参加頂く事になった。原則第一火曜日を定例のミーティング及び研究会と設定し、また、この定例会には、メンバー以外も参加出来るセミオープンスタイルをとった。E9 での上演アーティストのほか、観客やライター、他大学の若手研究者などが訪れ、議論が活発に行われている。

上演作品の記録活動は、プロジェクト参加者が分担して行い、継続的につづいている。だが、記録した映像や預かった資料が集積される一方、映像記録の方法や、記録や資料の活用方法（「誰が」「何のために」「どのように」活用するか）など、未解決の課題は多い。記録活動を許してくださっている劇団やパフォーマーの方々の意向を尊重しつつ、記録を活用するための方法を模索しているところである。

最後に、2 年間の活動を支えて頂いた、メンバーの諸氏、協力を頂いたアーティストと共に、村上花織氏、21 年 12 月に E9 を退職した福森美紗子氏に感謝の意を表す。

あごうさとし（芸術資源研究センター客員研究員）



劇場外観



舞台写真 (撮影：金サジ)